

研究論文

不登校の多様化と支援ネットワーク

「父母の会」を中心に

春日井 敏之¹⁾Diversification of School Refusal and the Support-Network
On “Parent Groups”

KASUGAI Toshiyuki

Nowadays, when children refuse to go to school it is considered as a crisis in adolescence that includes developmental issues such as deficiencies of boyhood and girlhood, psychological independence from parents, and formation of friendships. The conditions of those who refuse to go to school seem to be diverse and complex; some involve neurosis, others are related to juvenile delinquency, behavioral disorder, abuse, and slight developmental challenges. Consequently, intervention at school has been recognized.

This paper introduces the practice of “parent groups” as an example of support network to those children. Through the interaction in the self-help groups, the parents and teachers have struggled to find ways to understand and communicate with them. Accordingly, the effort has led to support children in terms of social independence including determining their future courses.

Key words : school refusal, diversification/complication, parents groups, support network, future course choices

キーワード : 不登校, 多様化・複合化, 父母の会, 支援ネットワーク, 進路選択

1 危機的年齢としての思春期にいる子どもたち

(1) ある小学校教師の話

小学校6年生を担当していたある教師から、懇談会の場で次のような話を聞いた。「6年生の3学期になると、クラスの三分の一くらいの子どもたちが出てこなくなることがよくあります。学校を休んで中学校受験のために塾に行ったり、自宅で勉強をしたりしているようです。親からは、違う理由で欠席連絡が入ります。でもその子どもたちが休むと、クラスのトラブル

が減るのです。そして、クラス全体がほっとした雰囲気になります」。何ともやりきれない切ない話である。

ここには、親の期待のまなざしを一身に受けながら、期待にこたえようと一生懸命頑張っている子どもたちがいる。小学校の低学年から塾に通い、大人からは叱咤激励を受け、時には学級で仲間にもストレスをぶつけながら、他者との比較の中で自己の存在を確認してきた子どもたちの姿である。

(2) ある中学校教師の話

また、荒れる中学校の状況は、地域的な困難

1) 立命館大学文学部

さもはらんでより深刻化している。ある研究会で中学校の教師から、次のような話を聞いた。

「3年間でありとあらゆる事件が起きました。一つはガラスがよく割れたこと。ほぼ毎日割れました。また、生徒たちはよくトイレにたまりました。トイレに座り込んでしまうのです。そこで食事もするし、授業中も動かずにいます。そのうち、女子トイレは破壊され仕切りがつぶされはざされてしまいました。クラスで変わったことは、ゴミ箱を置いたことです。前年度ゴミ箱のゴミが燃やされ、消防車が何度も来たためにゴミ箱は置かず、ゴミはすべて持ち帰りということになっていたのです。教室はいつもゴミだらけでした。」

このような荒れの背後には、就学援助受給率約50%、一人親の家庭約30%といった状況に象徴される、不況・リストラ・就職難の中での家庭生活の困難さがある⁽¹⁾。

表れ方は対照的であるが、「危機感をあおり立てられて競争に乗りながら不安をつのらせている子ども・親」と「早くから自分に見切りをつけ投げやりになっている子ども・親」と「その中間で困難な時代だから競争に乗らなければと揺れる子ども・親」の三極化がある。不登校が多様化・複合化し、増加し続けてきた背景には、こうした状況を反映した現代的危機があると考えている。

2 思春期における3つの危機

(1) 内包する少年期欠乏の危機

少年期欠乏の危機の中身は、子どもが遊びと労働を介して育つための「場と人間関係」の危機にあると考えている。その表われ方は、第一には、地域における「場と人間関係」の危機である。地域での親同士のつながりが乏しくなり、子どもの放課後も個別化・スケジュール化が進行してきた。時には親のよく知らないようなと

ころで、同年齢や異年齢集団の遊びを通して小さな冒険を体験し、楽しさや怖さも含めて実感できる場と人間関係が、地域では乏しくなっている。

第二には、家庭における「場と人間関係」の危機である。大量消費の市場経済とリストラを伴う労働密度の高まりは、家庭で子どもに労働を求め家事の協働を図るといった機能を急速に解体させてきた。家事や家業などの協働を通して頼りにされ、ささやかな役立ち感を実感し、子どもなりの誇りを育ててきた「場と人間関係」の危機である。

第三には、学校における「場と人間関係」の危機である。早期教育の過熱化や公立の中高一貫校の登場などによって、中学受験の激化や小学校からの序列化はより進行する傾向にある。小学校から中学校、高校と進行するほど、上位層への個別的・効率的な競争促進の教育メニューと、これ以外の層への包括的・意図的な教育メニューが、別立てで考えられている傾向は拡大しているように思われる。

(2) 親からの精神的自立の入り口まで行けない危機

思春期は親からの精神的自立の入り口である。親から見れば、「反抗期」と呼ばれてきた。しかし、親に反抗しながら心と身体を使ってぶつかり稽古をする以前に、この自立の入り口までたどり着けていない子どもたちが増えているのではないかと考えている。

その表われ方は、第一には、無関心、期待しない、ネグレクト、暴力的虐待といった形で、親から人とつながって生きるエネルギー（信頼感や具体的な術^{すべ}）がもらえず、粗暴さが目立つ子どもたちの増加である。ぶつかり稽古をしようと思っても、放置や抑圧された親子関係の中では安心して悪態をつきながらぶつかることは難しい。

第二には、親にルールを引かれ過大な期待を

受ける中で、過剰適応、気遣い、息切れ、自信喪失といった形で、親とぶつかるころまで行けない子どもたちの増加である。同様の傾向は、親の側にもある。つまり、進学塾や進学校にわが子を入れて、預けることで親としての安心を得て、子どもに対しては逆に気遣いをしながら、本音でぶつからないといった傾向の拡大である。親子で「よい子」「よい親」を演じているような状況がある。気持ちは並行のまま傷つくことを恐れ、ぶつかることをお互いが避けているような傾向が見られる。

第三には、両者の中間に位置する多くの子どもたちを含めて、まず自分のことを認めて欲しいと親に願う子どもたちの増加である。親が設定した目標を基準にした評価で切捨てられたり叱咤激励されるのではなく、子どもなりの苦悩や葛藤も含めて、まず自分をまるごと受け止めてくれる「安心の基地」を親に求めている姿である。

(3) 自己や他者と向き合う友人関係形成の危機

思春期は、小学校の頃と比べ他者からの評価や眼差しが大変気になってくる。小学校までの人間関係を土台にしながら、友人からの様々なアドバイス等を受け、自己を見つめる内面が成長していく時期である。小学校と中学校では、友人関係は質的に変化していく。

しかし、この時期の友人関係は、必ずしもうまく形成されていないように思われる。

その表われ方は、第一には、トラブルもあまり起きないような人間関係自体の希薄化の危機である。たとえば1995年以降、文部科学省による学校基本調査では、いじめの件数は減少している。この結果をどう分析するかである。

具体的には、学校・教師の取り組みの効果が出てきているのではないかと。いじめも起きないような人間関係の希薄化が背景にあるのではないかと。学校基本調査でも、いじめの特徴とされてきた集団化・特定化・長期化を伴う

攻撃は姿を変えて、個別化・不特定化・偶発的な暴力や器物破損の増加といった表れ方の変化が見られる。そう考えると、いじめが減少したと言うよりも、子どもの問題行動がストレートな暴力・器物破損へと変化してきたと見るべきではないか。いじめ自体についても、携帯電話などの普及によって教師にわかりにくくなったのではないのか、といった見方が考えられる。

第二には、双方向性に乏しく、一方通行に留まっている人間関係の危機である。特に1985年以降、テレビゲームの爆発的な普及によって、思考やコミュニケーション手段としての言語機能は後退し、情報伝達手段として言語を駆使しながらバーチャルな世界に漂う子どもたちは増加している。

第三には、孤独な受験競争が拡大し、他者との比較評価の中で、人間関係の分断・孤立化が進行している危機である。他者と比較され、その中で自分の位置を確認していく生活からは、自分と向き合い自分にOKを出していく自己肯定感は育ちにくい。

学校でのさまざまな協働の取り組みを通して、たとえば「平和やいのち」について考え、自分の思いや生活を綴ったり語り合ったりする中で、「つながっている」と実感できる友人関係づくりが、非常に重要になってきている⁽²⁾。

3 2003年度学校基本調査と「不登校問題に関する調査研究協力者会議」

(1) 2003年度学校基本調査結果より

文部科学省の「学校基本調査」にもとづく報告「生徒指導上の諸問題の現状(速報)」(2003)によると、2002年度の全国の小中学校において30日以上欠席をした不登校の児童生徒数は、13万1211人(前年度比5.4%減)にのぼった。中学校で37人に一人、小学校では280人に一人

にあたり、約8割は中学生である。

これは、前年度よりも約8000人の減少であり、1991年度に欠席日数を30日以上として調査を開始して以降、初めての減少となった。しかし、2002年度小中学校の児童生徒数が、前年度よりも12万7000人減少していることを考慮すると、事態は決して楽観できない。

不登校は1960年代の旧文部省による調査開始以来増加し続けてきた。この10年間でも児童生徒数が約三分の二に減少する中で、不登校の数は2倍以上に増加してきた。こうした流れが変わったとはとても思えないからである。

勿論、1995年から中学校を中心に始まったスクールカウンセラーの配置により、教師へのコンサルテーション活動や子ども・保護者への支援効果が少しずつ表れている面もあると考えられる。ちなみに、2003年度は約45億円の予算が組まれ、スクールカウンセラーの派遣学校数は約5500校が見込まれている。2005年度には、全国の公立中学校(全校3学級以上の規模)約一万校への全面配置が目標とされている。

しかし、小中学校の教師からは、学校で不登校の児童生徒が減少したという話はほとんど聞かれない。むしろ、欠席30日の周辺で、たとえば「頑張り過ぎた息切れ」を伴う不登校だけではなく、「問題行動」、「学力不振」、「ネグレクトを含む虐待」、「軽度発達障害」を伴う不登校など、態様が多様化・複合化してきていることの方が、重要な今日的課題ではないかと考えている。

つまり、欠席日数が30日以上の児童生徒の数をどう減らすかという発想ではなく、神経症的な不登校だけでは捉え切れない、態様の多様化・複合化に対応した学校の取り組みが求められているのである。その際に大切なことは、「子どもが誰にどのようなSOSを求めているのか」という発達課題を教師と親や専門機関などが共通認識していくことである。そこから具体

的な取り組みの方針も立てることができる。

多様化・複合化する不登校の中で、自宅できちんとまずゆっくり休むことを求める子どもたちと同時に、自宅にひきこもっているのではなく、積極的な関わりや援助を親、教師、友人などに求めている子どもたちも増えている。たとえば児童虐待を伴う場合など、学校や児童相談所に危機介入が求められてくる不登校、家庭が安心できる居場所ではなく地域に溜まり場を求めながら「非行・問題行動」を繰り返す不登校などは増加傾向にある。

30日以上長期化する不登校が微減した背景には、このような「ひきこもらない不登校」の増加傾向の反映もあると考えている。

(2)「不登校問題に関する調査研究協力者会議」 報告より

こうした事態を受けて、2002年8月には10年ぶりに「不登校問題に関する調査研究協力者会議」(委員16名)が再設置され、半年余りという短期間に14回という審議を経て2003年4月には「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」(以下「報告」と略)が出された。ここでは、学校における取り組みの工夫が強調され、「1.魅力あるよりよい学校づくりのための一般的な取組」と「2.細かく柔軟な個別・具体的な取組」が提言された。前者では、「すべての児童生徒にとって、学校を安心感・充実感の得られるいきいきとした活動の場とし、不登校の傾向が見え始めた児童生徒に対しても、不登校状態になることを抑止できる学校であることを目指すこと」が強調され、後者では、「取組は、基本的には、不登校となった児童生徒に対し、きめ細かく柔軟な対応を事後的に行うための学校における取組について述べたものであるが、これらの事項への取組を日常的に充実することは、同時に、すべての児童生徒や、不登校の傾向はあっても完全な不登校状態にはない児童生徒に対する取組としても重要で

ある」ことが強調された⁽³⁾。

他方では、審議の冒頭に委員から出された「教員や親にも不登校を容認する風潮がある。『誰にでも起こりうる』を、だから起きても仕方がないと誤解し解釈をしてしまう」といった主旨の発言に対して、全国のフリースクールや「親の会」などからは、「自立支援というよりも、学校への性急な再登校にこだわった適応指導が強化されるのではないか」といった反発や、論議の推移を危惧する声もあがった。

勿論、学校現場で「報告」を受け止めながら取り組みを進める際に、個々の不登校の状況を踏まえないで、一律に「欠席日数を減らす」取り組みだけが強調されるようなことがあってはならない。

しかし、「報告」を丁寧に読んでいくと、1992年に旧文部省の「学校不適応対策調査研究協力者会議」が出した報告「登校拒否（不登校）問題について」の視点に立ちながら、多様化・複合化する不登校問題に対し、学校を含めた多様な取り組みが提起されていることも理解できる。こうした点は、今日の不登校をめぐる態様を踏まえた内容を含んでいる。

(3) 不登校支援ネットワークに関する二つの視点

そうした時にこそ、担任・学校と親・家庭だけではなく、学校内外の人的・物的資源を生かした支援ネットワークの形成が重要な課題になってくる。

不登校支援ネットワークを語るときに、検討すべき二つの視点がある。第一は、内に開かれたネットワーク、第二は外に開かれたネットワークである。

たとえば、後述する地域における「登校拒否の子どもと育つ父母の会」の取り組みは、個人の実践にとどまらず場を共にする人々の協働実践として、内に開かれたネットワークの中で取り組まれてきた。

それは、参加者が「安心できる居場所」を実

感できることであると考えている。具体的には、話を聴いてもらえる心地よさ、自分の負の体験やネガティブな気持ちを話せる安心感、子どもと向き合い認め合うことができるようになるまでの自身の葛藤と変容などを、対等な関係の中で共有していくことである。

同時にそこでの取り組みは、内向きに自己完結しているのではなく、学校、専門機関、地域などの外に開かれたネットワークを志向している。そこでは、協働して子どもを支援しながら、同時に親や教師も支えられていくようなネットワークを展望して、取り組みが続けられてきたのである⁽⁴⁾。

児童虐待や軽度発達障害など、多様な背景を含む不登校への取り組みが求められている中で、児童相談所や医療機関、ケースワーカーなどの専門機関と連携した不登校支援のあり方が重要となっている。それぞれの果たす役割や独自性を生かしながら、双方向性を持って外に開かれた不登校支援ネットワークをどう作っていくかが、重要な現代的課題となっているのである。

4 1990年代以降の不登校問題の背景と取り組み

1990年のバブル経済崩壊以降の10年余りで、子どもや青年をとりまく家庭・地域・社会の状況は激変してきた。企業の倒産・失業・リストラのもとで、基盤となる家庭は不安定さを増し、未来を担う青年の就職難も重なり、大人も子どもも将来への夢や希望が持ちにくくなっている。

私は、20代後半から30代前半にかけての若い保護者層に、この不安や矛盾が集中的に表われているように感じている。一方では、親自身が自己不全感をつのらせ、就職の困難さも含めて自分探しや自己実現の渦中にあり、子育てにまでエネルギーが十分回らないような状況がみ

られる。他方では育児不安や受験競争を意識し、早期教育や塾通いに子どもを駆り立てているような状況もみられる。階層の二極化傾向の拡大である⁽⁵⁾。

しかし、この時期は不登校問題に対して画期となる取り組みもなされてきた。1992年に旧文部省の「学校不適応対策調査研究協力者会議」から、「登校拒否（不登校）問題について」という報告が出されたことである。

ここでは、不登校への対応の基本的視点として、次の五点が強調された。登校拒否はどの子にも起こりうるものである。学校生活上の問題が起因して登校拒否になってしまう場合がしばしばみられる。学校、家庭、関係機関、本人の努力等によって、登校拒否の問題はかなりの部分を改善ないし解決できる。子どもの自立を促し、学校生活への適応を図るために多様な方法が検討される必要がある。子どもの好ましい変化は、たとえ小さなことであっても自立のプロセスとしてありのままに受けとめ、積極的に評価すること。学校はまさに児童生徒の自立の営みを支援する場なのである。

私は、この基本的視点は、それまで家庭の責任や本人の性格に向けていた不登校問題の基軸を社会や学校のあり方に転換し、保護者の悩みを受けとめ、子どもの自立を支援する場として学校の役割を強調した点に大きな意味があると考えている。

実際、子どもの自立を支援することは、学校への再登校を実現することと必ずしもイコールではない。子どものペースに合った自立を支援することは、学校自体のあり方を見直したり、学校以外に自立支援の居場所を広げていく取り組みも含まれるからである⁽⁶⁾。

5 多様化・複合化する不登校の態様と検討課題

不登校の態様については、これまで様々な分

類がなされてきた。たとえば、神経症的不登校、怠学傾向の不登校、精神障害による不登校、積極的・意図的不登校、一過性的不登校などである⁽⁷⁾。

しかし、年々その態様傾向は多様化・複合化している。私は、積極的・意図的不登校と精神障害の前駆症状による不登校を除いた大まかな態様として、取り組みをふまえながら次の八点を考えている。ただし、このような分類に子どもをあてはめるのではなく、様々な要因を含んで多様化・複合化している不登校の子ども理解を深め、取り組みを検討する際の視点にしていただければと思っている。

よい子の息切れなど「過剰適応タイプ」（がんばりすぎの不登校）、友人関係が結びにくいなど「社会的未熟タイプ」（育ちそびれの不登校）、問題行動を伴うなど「問題行動タイプ」（やんちゃな不登校）、低学力など「学力不振タイプ」（授業が苦痛な不登校）、学級集団自体に入りにくいなど「集団不適合タイプ」（外では元気な不登校）、何に対してもやる気が乏しいなど「意欲喪失タイプ」（なんとなく不登校）、家庭での登校への期待が乏しいなど「期待喪失タイプ」（支えの乏しい不登校）LD、ADHDの症状を伴うなど「軽度発達障害タイプ」（特別なニーズの不登校）である⁽⁸⁾。

したがって、取り組みの視点も一様ではなく、当面ゆっくり休ませた方がよいこともあれば、半歩前進の課題を設定して励ましながらクリアさせていった方がよいこともある。また、親や教師が指導性を発揮して、生活や行動の改善を援助しながら登校を促す方がよいこともある。

次に、現在不登校問題に対して必要と考えている取り組み課題について、今後のためにポイントをいくつかあげておきたい。

不登校の多様化・複合化に即した子どもの課題分析と学校からの具体的な支援、その保

護者に対する子ども理解と取り組みを共有化するための学校からの具体的な支援，専任教員配置を含めた担任を支える校内でのチーム支援のシステム化，スクールカウンセラー，児童相談所，ケースワーカーなどを含めた校外の専門機関との連携・協働化，予防的・開発的アプローチとしての学校行事，授業，生徒指導，校則などの見直しと教師と子どもとの信頼関係の形成，予防的・開発的アプローチとしての保護者全体に対する子育て支援の具体化，公営・民営を含めた学校以外の多様な居場所の開発と公的援助，有効な援助である青年・学生と不登校の子どもが関わるボランティアやインターンシップの開発とシステム化，中学卒業後に課題となる学力・進路問題（進学・就職等）への教育行政や高校などからの具体的な支援，

社会的ひきこもり状況にある青年の実態把握と出会いや就業につながる地域ネットワーク支援の検討などである。

6 不登校に取り組むシステムづくり 「チーム会議」で支える

学校現場では，教育相談や生徒指導に有効なカウンセリング的アプローチができる専任教員への期待は高い。

私は，すべての小・中・高等学校で，一定の研修を重ねながら生徒指導や教育相談の分野で全校的な視野を持ち，スクールカウンセラーなども加わったチーム会議のコーディネーターとしての役割を果たしていく「教師カウンセラー」とも言うべき専任教員の配置が必要だと考えてきた⁹⁾。

こうした専任教員は，スクールカウンセラー，児童相談所，ケースワーカーなどの校外の専門機関と教師集団をつなぐコーディネーターの役割も果たしうるからである。

現在ほとんどの小・中・高等学校では，教育

相談部や保健部は作られているが，専任の教育相談部長はいないケースが多い。生徒指導部長が兼任をしたり，養護教諭が教育相談部のコーディネーター役を担ったりしていることも少なくない。

スクールカウンセラーは心理治療の専門家であり，教師は教育の専門家である。専門家同士が持ち味を出し合って，子どもの発達課題や支援のあり方について対等な立場で論議し協働していくことが重要である。こうした活動をコンサルテーションと呼んでいる。

たとえば，スクールカウンセラーがコンサルテーション活動として，不登校事例への取り組みを検討するチーム会議に出席する場合がある。その際のあり方については，次のように考えている。

教育の専門家である教師と心理治療の専門家であるスクールカウンセラーは，対等な関係である。チーム会議の目的は，子どもの発達・成長を支援していくことにある。同時にチーム会議は，子どもと前線で向き合う担任を支える場である。チーム会議は，必要に応じて関係する教師などが自由に参加できる開かれた会議にしていく。スクールカウンセラーとの協働として，子ども理解と取り組み方針を深めていく。子ども理解に基づく取り組み方針を立てながら，教師の集団的な実践力量を高めていく。それは，子ども理解を深める際のまなざしを，すべての子どもや親に注ぐまなざしに発展させていくことである。こうした取り組みは，生徒指導と教育相談のあり方に反映され，やがて「生徒支援部」といった形で両者の統合につながっていく。さらに，若いスクールカウンセラーが急増している中で，チーム会議は教師だけではなく，スクールカウンセラーを育てていく場としても重要になっている。今後チーム会議には，心理臨床分野だけではなく，ケースに応じて医療・福祉・司法などの専

門機関との協働を図っていくことが求められている。

実際、不登校の多様化・複合化には、軽度発達障害や境界例の子どもなど、専門的な診断や治療を必要とするケースも増えている。また、虐待、離婚、リストラなど、学校だけでは抱えきれない家庭事情を背負ったケースも増えている。教師は自らの限界を知ったうえで、専門の心理・医療・福祉・司法機関などと協働して取り組む必要に迫られるケースが増加している。

スクールカウンセラーに対しては、臨床経験を積みながら成長する場として、子どもや保護者へのカウンセリングも大切である。しかし、特に協働化の視点からは、学校現場の教師を支援するコンサルテーション活動への役割期待が高まっている。勿論、基本的には、まず各学校のニーズに応じた協働化を図っていくことがスタートとなる点は、再確認しておきたい。

7 「登校拒否の子どもと育つ父母の会」の誕生とあゆみ 世話人の役割

京都府の南部、宇治市・城陽市・久御山町にまたがる地域に、「登校拒否の子どもと育つ父母の会」(以下「父母の会」と略)が誕生したのは1991年3月であった。すでに例会は13年目を迎え、2003年12月で467回を数えるに至った。現在も毎月2回の例会を重ねているが、他にこれだけの例回を数える「父母の会」には出会っていない。毎回の参加者は、平均して10名前後である。

京都府下で初めての「父母の会」誕生のきっかけは、地域に呼びかけて開催した連続講座であった。「登校拒否とその周辺」と題して計3回、毎月1回開講した連続講座は、高垣忠一郎氏、村上公平氏(大阪府立高校教諭)と私で担当し、参加者の合計は113名を数えた。その内父母は80%を占め、関心の高さと抱える課題

の深刻さをうかがうことができた。

連続講座後に、わが子の不登校を抱えて参加した父母たちから「このまま終わってしまったのではもったいない。もっと話せる場がほしい」という声が上がリ、渡りに船と世話人になってもらいながら「父母の会」は歩み始めた。私も世話人の一人として当初から参加し、その後小学校教員を退職された大久保望氏に代表世話人を受けていただき、現在に至っている⁽¹⁰⁾。

例会は、出会いと交流が中心であるが、時々「進路の考え方と支援」といったテーマで学習講座も行ってきた。講師は、学校関係者の世話人などである。

世話人もすでに何回か代替わりしていった。世話人会を別に開催していったことで、世話人の悩みや気になっていることなどを率直に交流する場になっていった。同時にさまざまな事情で交代していく世話人の労をねぎらいながら、体制を継続していく場にもなっていった。

例会では、ささやかな茶菓子を用意しながら、参加費は会場費等を含めて500円徴収している。初めての参加で言葉よりも涙が先に出てしまうような母親に、何年間も不登校のわが子と関わりながら一緒にくぐってきた思いを、押しつけではなく話している世話人の姿に多く出会った。「私も初めは病院だけではなく、いろんな所を回ったし何とか行かせようとしてた」「うちの子も長いこと休んでたけど、今はなんとか元気にやってるよ」「何年も子どもと付き合ってきたけど、またレールを引こうとしている自分に気付くことがある。でも気付けるようになった自分をえらいなと思えるようになった」などと話しながら、参加者の話を聴こうとしている世話人の姿がある。

現在の世話人は、父母が6名、学校関係者が私を含めて4名の計10名である。世話人の都合も出し合いながら、毎月の当番を決めて運営している。

例会の持ち方も、8年あまり継続してきた毎週開催を見直し、2001年度からは月2回にして少しゆっくりとやっていこうと、世話人会で相談して変更してきた。

今日まで継続できた理由をいくつかあげておきたい。代替わりを含めた世話人の体制づくりと世話人会の開催、教員や相談員も参加した協働の世話人体制の維持、公的な例会会場の確保と固定化、参加費の徴収と参加者への還元、毎月のニュースレターの発行と発送に関わる教職員組合のバックアップ、新聞各社への「催し物案内」等での紹介依頼、状況に応じた柔軟な例会の見直しなどである。

8 「父母の会」と教師としての葛藤・変化

「父母の会」誕生から10年間程、私は中学校現場の教師として、また世話人の一人として関わってきた。初めの頃は、学校や教師との関わりについて、父母から不信や不満が述べられるたびに、それがすべて私に向かって発言されて、私を責めているように聞こえてならない時期があった。途中から段々腹が立ってきて、「私も一生懸命やっているのに、責めないでほしい」といった反撃をしてしまうこともよくあった。学校側を代表して責められるようなプレッシャーを感じて、参加しづらいという他の教師の気持ちもよくわかった。

しかし話を聴くうちに、私が感じている気持ちは、実は参加している親が、学校との関係の中で感じ続けてきた気持ちと同じだとわかってきた。わが子が不登校になった時に、親は学校から責められ、地域から責められ、時には家族からさえも責められ、自分で自分を責めていく。そんな親の姿を見て、「みんな僕のせいや」と子どもが自分を責めていく構図は生まれやすい。例会に参加するまでに、周囲から十分責められ傷ついて、必死の思いで参加している親の

姿が、実感を伴って見えてくるようになった。

同時に、学校では生徒指導や教育相談に関わり、カウンセリング的アプローチの重要性を唱えながら、他方では例会に参加してやっと言えた親の辛さや本音を受け止めきれない私自身の底の浅さを感じる事がしばしばあった。しかし、今振り返ってみると、「親を責めんといて」、「教師を責めんといて」と本音を言い合えたことが、心地よい対等の関係づくりの基礎になっていったと考えている。それは、「この子は、誰にどんなSOSを求めているのか」という、子ども支援の視点を共有していくことでもあった。

私自身も親の話を聴きながら、自分の子育てを振り返ったり、その中の悩みや喜びや葛藤を話すこともしばしばあった。教師としてというよりも、「きっと子どもは、そんなことを言ってもらおううれしいと思うよ」などと、親として発言していることがよくあった。

また、さまざまな話を聴いていると、教師がよかれと思ってしていることと親や子どもが求めていることとの間のズレを感じる事がよくあった。不登校の子どもを担当している教師を対象にしてある調査を行ったときに、「今まで90回も家庭訪問をしてきた。これ以上何をせよというのか」といった記述に出会ったことがあった⁽¹¹⁾。例会では、「学校がなかなか動いてくれない」という発言もあれば、「先生の熱心さがつらいときもある」といった発言もあった。

私は、例会では「たとえ不登校の担任経験が豊富であっても、この子の場合にはどうしたらいいのかわからないことが多いから、先生には遠慮しないでどうしてほしいのか伝えた方がいいですよ」と親に返ししながら、4月に担任したクラスでは、「私は、どうさせてもらったらいいでしょうか」と、まず親に聴くようになっていった。

私にとって学校で出会ってきた子どもたちや

同僚たちと同じくらい、「父母の会」での出会いが、かけがえのない財産になり「命綱」になってきたことを実感している⁽¹²⁾。

9 「父母の会」と親としての葛藤・変化

(1) 親にとって「父母の会」の意味の深まり

親にとって「父母の会」の存在は、どのような意味があるのか。例会の中での発言を少し紹介したい。

「不登校についての本を読んで、落ち込んでしまったことがよくあったが、『学校に行かなくても子どもは育ちますよ』と言われてほっとした」「話しているうちに、こんな弱さがあると自分が見えてくるようになった。でも、ダメでもまたそこからやっていけばいいと思えるようになった」「子どもの不登校が、親の初めての挫折だった。でも自分だけではないと思えて、追いつめたら子どもを苦しめることになると思った」「ホッとできる場だった。話しながら待つことができた」「学校くらい行けなくていい。生きてたらいいと心から思えた」「時にはプレッシャーをかける人、かけない人が、両方あってもいいと思えた」「地域を越えて集まれて、逆に気楽に話せる」「話途中で、自分の課題が整理できていった」「活字だけでは伝わらないものが伝わってきて、共有できた」「いろんな情報を得ることができた」「個々のつながりも生まれ、電話で相談したりできるようになった」「人の話を聴くのは、自分の役にも立つ。自分のバランスがとれていく」などである。

少し整理してみると、「父母の会」が、有効なグループ・カウンセリングの場になっていて、参加しながら話を聴く姿勢が育っている。

「父母の会」が、仲間同士が支え合うピア・サポートの場になっている。とりわけ、支えてもらった経験を支えることに生かしていく世話人の経験は重要である。このような中で、初

めの例会参加者にとっても、受け入れてもらって安心できる場になっている。教師・学校と親・家庭の不十分さや弱さは率直に話し合うなかで、むしろ両者を対立的にとらえることは少なくなくなっていった。学校のあり方や親のあり方から始まって、大人も子どもも希望が持てる社会のあり方を語り合う場にもなっていた。「父母の会」の人間関係が、日常生活の中でつながり合えるネットワークに発展していった。

(2) 事例の紹介 Aさん(母親)の話から(現在通信制高校2年)

次に、例会での具体的な事例の一部を、当事者の了解を得て、親の視点から紹介したい。

中学1年で息子が学校に行かなくなったとき、親は自信をなくしヘド口の中に沈んでいきました。勉強も良くできたわが子に、有名大学に入れようと頑張ってきた親の期待を裏切られたと思って、「この子がいない方が楽だ」とまで思いました。「父母の会」に出会って、この気持ちを初めて言えたとき、気が楽になりました。初めの頃は、「父母の会」でよく泣いていたが、子どものためではなく、自分のために泣いていたと思う。大久保先生が「学校に行かなくても子どもは育ちますよ」と言ってくれたことは忘れられません。それまで、誰も言ってくれなかった言葉でした。

晴れの日も雨の日もある中で、「父母の会」で雨宿りをしながら5年ほどたちました。最近、子どもが学校に行かなくなってから、初めて次のような快い会話ができて、二人で泣けたことがありました。

M: 「このごろあんまり勉強する気、起こらへんみたいやなあ」

C: 「はあー、レポートは夢があったり、せっぱつまったりしたらできる。でも僕には夢がないし、好きなことに結びつかない勉強をしている。どうせ僕が悪いんやけど。お

かんは何で勉強してた」

M：「小さいことを一つ一つ達成しようとしていただけや」

C：「えらいな」

M：「でもあんまり何にも考えてなかった。医学部に行って医者になってもかっこええと思っていた」

C：「不純やな」

M：「でも学歴社会だということは知っていた」

C：「ふん、ええ時代やったから、そう思えるんや。今は、生きていくのがむなし時代や。ええ大学出たやつが、電車の中で携帯を使ってる。お父さんも一緒や。電車の中で携帯を使う。もうええわ」(泣き出しながら二階が上がってしまった息子を、しばらくして母親は見に行った)

M：「泣くなよ、なんで泣くんや」

C：「人生ってむなしいなや」

M：「なんでやねん。晴れたり雨が降ったり、いろんな日があるやん」

C：「僕は台風や、いや曇りばかりや」

M：「曇りでも洗濯物は乾くで。あのなあ、お母さんはまっすぐに生きてきて、薬剤師になって、やめて、この頃あまり向いていなかったんとちがうやるかと思うことがある。長い間自分自身に殻があったけど、おまえが学校に行かないことを選んで、なんかいるんなふうに暮らしていけるんやと思えるようになった。毎日服着替えて、ご飯食べて風呂入って、たいくつやけど、きちんと暮らしているやんか」

C：「それでええと思ってるんか」

M：「ちゃんと暮らして、日を送っているやんか」

C：「お父さんに携帯を電車の中でかけるの、やめてほしいわ。電車の中で、ほとんどの人がメールを打っている。異常や。電源を

切るように言われているのに。正論を言っても嫌われる世の中や」(この後しばらく話が続いた後で、息子は次の一言を)

C：「少し話して、ムシャクシャしていたのがスーッとした」

M：「お父さんにも話してあげや」

C：「お父さんは話しても、強く言うからあまり言えない。強いわ」

M：「いや、そんなことないで。お父さんかて、弱音はくことあるで。ただ、はかないようにすごい努力はしているんや」

C：「そういうとこすごいし、尊敬してる」

子どもが中学校に行かなくなって、やがて通信制高校に行くようになって、あれから5年がたっていた。それは自分のために泣いていた母親が、初めて子どもの前で子どものために泣けた記念日だったのかも知れない。子どもは自分のことを話し、電車の中での携帯へのこだわりを話し、父親のことを話した。私にはその姿が、母親が例会で初めて「この子がいない方が楽だと思った」と本音を語った5年前の姿と重なって見えた。5年後に話してスーッとした子どもの気持ちと、5年前に話して気が楽になった親の気持ちが解け合った、二人にとって快い記念日だったのでなはいかと思う。

人は自分の中に存在する負の体験やネガティブな気持ちが出せる場と受けとめてもらえる関係が成熟し、話せて聴いてもらった時に、その自分を否定せずに揺れながら受け止めて生きていけるのではないかと思う。私は、このような共存的他者との出会いの中から、自己肯定感は育っていくのではないかと考えている。

一方、息子が尊敬する父親は、最近会社でA評価を求め続けてきた生き方を見直している。「A評価は、みんなのおかげで得られてきた」と母親に話し、これからはA評価にこだわることをやめると伝えた。現在の評価は、BのAであり、これからはBのB、つまり「普通の普通」を目

指すと言っていると母親は話してくれた⁽¹³⁾。

「父母の会」がなかったら、このような母親との出会いもなかったであろう。例会に参加する中で母親の変化は、わが子の方と関係の変化にもつながっていった。決して平坦ではなかった子どもの変化と成長は、父親の生き方や夫婦の在り方にまで影響を与えていった。

私は、「父母の会」での出会いと交流から始まったこのような変化と成長に参加者が関わり続け、相互に影響を受け合っていくダイナミックな働きを、内にも外にも開かれた不登校支援ネットワークの一つの姿として捉えている。

10 不登校に対する実践的視点 「待つ」という働きかけ

不登校の子どもへの援助のあり方で大切なことは「待つ」ことであるとよく言われる。

大阪の親や教師や相談員からなる「登校拒否を克服する会」では「信じる、任せる、待つ」を原則にして、親・教師・相談員の交流と不登校の子どもたちへの自立支援を続けてきた⁽¹⁴⁾。

私自身も地域で13年間、「登校拒否の子どもと育つ父母の会」に関わってきた経験から、基本的には同感である。しかし、「待つ」ことは放置することではなく、子どもときちんと向き合いながら関わり続けていくことだと考えている。

最近では青年の社会的ひきこもりが課題になり、中学校の不登校から20代になっても家庭から出にくい青年や、一旦企業に就職などをして挫折から自宅にひきこもったままになる青年も増えている。

このように「待つ」という言葉は、学校を休み始めた生徒に対しても社会的ひきこもりが長期化している青年に対しても同じように使われるが、その内容は当然異なる。共通点をあげれば、「回復段階に即した継続的支援」、つまり

「回復段階に応じて必要な働きかけを続けながら自立を待つ」ことにあると考えている。

たとえば、頑張り続けてきた子どもが息切れをして登校できなくなった時、親や教師は様子を見ながらとりあえずゆっくり休むことを認めていく。同時に、教師は動揺している親の話を聴きながら、不安を受け止めていく。子どもが家庭でゆっくり休めて、甘えを出してきたら、親はそれを受け止めてできる範囲で応える姿勢を見せていく。また、親や教師は、少し元気になった子どもの遊びや趣味を無理なく共有できて、それをきっかけに心をつなぐような関わりをしてみる。その時期に、可能であれば友達や青年など、親や教師以外の第三者とつないでいくことを試みる。進路選択の時期がきて、子どもが中学三年であれば、様子を見ながら他の生徒と同じ時期に教師と連携して必要な情報だけは子どもに提供してみる。何もしないことも含めて進路選択をどうするのか、親はアドバイスをしながら最後は本人が出した結論を尊重していく。中学の卒業後であれば、アルバイトなどで働くことを促したり、フリースクールなどの居場所を紹介して押し出してみる。反応を見ながら、押しすぎたと感じたら引いて様子を見ていけばいい。

こうした働きかけもを含めて、「待つ」ことの中身として捉えている。したがって、不登校の態様と回復状況によって、待ち方・働きかけ方は当然異なってくる。

11 進路選択は社会的自立への第一歩

(1) 不登校における進路選択の二つの意味

子どもが小中学校で不登校になった場合、進路選択という課題は、狭義には「進学・就職先などの選択」を意味する。しかし、広義には「新しい生き方の模索」という課題と向き合うことを意味している。

子どもにとって、共通して意味のあることは、「進学先・就職先などの選択」も「新しい生き方の模索」も社会的自立への第一歩であるという点である。

子育てや学校教育の最終目標は、子どもの社会的自立を支援することにあると考えている。私は社会的自立について、「ひとが人間関係・社会関係の中で『生きる意欲・目標・実践力』を発揮し、夢や希望の実現をはかる過程」と考えている。

ここでは、夢や希望を持つこと、意欲や目標を持つこと、実践力をつけること、人間関係を結ぶ力などが、自立の中身として大切になってくる。勿論、自分の夢や希望を実現していくことは簡単なことではない。それだけに、「不安や葛藤」が出せて共有しあえる人間関係の形成が重要な意味を持っていると考えている。

「今から思うと自分の意志で休み始めたことが自立の一步だった」、「登校拒否もその人の進路と考えたらいいのではないか」、「今は、自分の道をゆっくり生きたいと思う」。これは20代の青年たちが、小中学校での自身の不登校を振り返って語ってくれた言葉である。

親からみれば、学校自体にさまざまな課題があったとしても、とりあえず登校してくれていれば、それだけで一安心しているようなところがある。そうした眼差しの中で、さまざまな辛さを抱えながら、気持ちはそこになくても、学校にだけは通い続けている子どもたちの姿もある。

そんな中で、「競争にとらわれない生き方」、「親の引いたレールにとらわれない生き方」、「学校自体を相対化した生き方」、「新しい居場所を求める生き方」などを模索する姿として不登校をとらえ、子どもの自己決定を尊重しながら支援していく必要がある。

また対極には、早くから学校生活を降りてしまったり、学校から排除されたりして、地域に

溜まり場を求めて漂っている子どもたちの姿もある。その中で気になっていることは、「生きる支えを失っている不登校」と言っているような子どもたちの増加傾向である。

特に、「問題行動」や無気力な状態を伴う不登校の中に多くみられる。この姿は、子どもたちがさまよいながらも、学校や家庭に「安心できる居場所」を求めている証しであると考えている。

いずれも、子どもたちの心と体が、現在の社会、学校、家庭の課題に正直に反応し、不登校という生き方を通して、その変革を大人たちに求めている姿と捉えることもできる。

(2)「進学先・就職先などの選択」が課題になるとき

「何もできない時期もある。逆に何もしないことの大切さもあると思う」、「16才の時、アルバイトをきっかけにして外に出られるようになった」。これも、不登校を経験した20代の青年たちの言葉である。

「進学先・就職先などの選択」が子ども自身の課題になるのは、心と体の十分な休息と排除されずに受けとめてもらえる人間関係などの中で、元気を回復してきた時期である。一方親の立場からすると、学校に行かないことで欠落していく学力への心配、その先にある進路選択や将来への不安は、不登校になった初期から大きなウエイトを占める。

そこにしばしば、子どもと親のズレが生じる。「急がば廻れ」という言葉があるが、大切なことは子どもの回復のペースを尊重していくことにある。そのうえで、たとえば中学3年生であれば、二学期の後半に様子を見ながら担任の先生と連携して、子どもに進路選択の情報を提供していくこともある。その際親や教師は、アドバイスはしても本人がそのとき出した決断を尊重していくことが大切である。そこから、次の

多様な展開が生まれていくからである。

学校紹介パンフレットなどには目もくれずに、徒勞に終わるかも知れない。しかし、「何もしない」ことも含めて、公立私立の「定時制、単位制、通信制、全日制高校」、「高等専修学校、専門学校」、「大検予備校、サポート校」、「家庭教師、フリースクール、フリースペース」、「海外留学」、「アルバイト、就職」などの選択幅がある。

ケースバイケースであるが、新たな受験勉強を課すというよりは、学び直しの場を求めて、今のままの子どもを受け入れてもらえる学校などを増やしていくという発想も必要である。これは、子ども達の「学習権の保障」であり、この視点から公立高校入試における内申の扱いなどに関して、教育行政や高校に具体的な手だてを求めていくことも大切なことである。

家庭で元気を回復してきたときに子どもが求める出場所も多様であり、「学び直しの場」、「人間関係の幅を広げる場」、「所属感のある居場所」、「将来の職業選択を考える体験の場」などが考えられる。子どもの力を信じて丁寧に向き合いながら、押したり引いたりする中でこそ先は見えてくると考えている。

注

- (1) 石田あきら「困難な状況の中での日々の歩み」、2002年度教育研究全国集会報告書、2003年を参照。また、石田あきら他「座談会子ども・家族の困難と社会福祉」総合社会福祉研究所編『福祉のひろば』409号、かもがわ出版、2003年も参照。座談会の中で石田氏は、「12～13歳の子どもが、とにかく公共のものを簡単に壊す、ゴミは散らかし放題で整理整頓ができない。それから衛生観念がなく、トイレの中でたむろして地べたに座る、食事をする。唾をかけあって遊ぶ」「30代の保護者がほとんどですが、一番若い例では、36歳で孫がいました。僕が担任した子のお姉ちゃんが中学を出てすぐ子どもを産んだのです。仕事帰りに夜遅く車で走ってい

たら、出産して一か月そこそこのお姉ちゃんが、ヘルメットもしないでバイク二人乗りで追い越していく」といった、自立の課題や支えとなる家庭状況の困難さを指摘しながら、地域と学校を含めたネットワーク支援の必要性を強調している。

- (2) 金森俊朗『いのちの教科書 学校と家庭で育てたい生きる基礎力』角川書店、2003年及び、金森俊朗・村井淳志『性の授業 死の授業 輝く命との出会いが子どもを変えた』教育史料出版会、1996年を参照。
なお、私は2003年12月に、教育人間学専攻の3回生ゼミ生17名とともに石川県金沢市立南小立野小学校の金森氏の学級を訪問し、授業参観と懇談の機会を得た。小学校3年生の授業は、自分が生まれたときのことを親から聞きとり、学級で報告をしていく「いのちの授業」、祖父母や親の仕事を訪ね聞き取り、学級で報告をしていく「お店調べの授業」などであった。金森氏は、授業後私たちとの懇談の中で、「性教育は、知識・理解だけではなく、いのちを大切にすることはどういうことなのか、生命観、人間観を育てるために行っている」、「親への聞き取りなどを通して調べることの深みは、親への観が変わっていくような調べにある」、「人と人を学びでつなげていくことを通して、認識や思いがリアルになれば、話す中身や書く中身は深くなる」といった点を強調されていた。
- (3) 文部科学省・不登校問題に関する調査研究協力者会議「今後の不登校への対応の在り方について(報告)」、2003年を参照。
- (4) 高垣忠一郎・春日井敏之編『不登校支援ネットワーク』かもがわ出版、2004年を参照。ここでは、ともすれば対立的に捉えられることが少なくない、不登校の親の会の取り組み、学校での実践、地域でのNPOなどによる子どもの居場所づくりの3分野の関係者が、京都・地域という同じ土俵で、子どもを中心に置きながら取り組みを進めてきた姿がある。各自が所属する場で安心できる居場所を実感できる「内に開かれたネットワーク」と関係者・関係機関相互の協働を進める「外に開かれたネットワーク」を志向する執筆者29名の取り組みがリアルに描かれている。
- (5) 苅谷剛彦『階層化日本と教育危機 不平等再生産から意欲格差社会へ』有信堂、2001年を参照。苅谷氏はこの中で、「階層と教育」の問題

を「教育による／教育における階層間格差の拡大」として捉え、「教育達成における「結果の不平等」は、能力の差異のみによってもたらされるのではない。出身階層の影響を受けた努力の不平等も、そこに介在している」（159頁）と指摘し、対処にあたる二つの原則を提案している。その内容は、「下に手厚く」を大原則に、教育における初期の階層格差を縮小するという第一の原則と、それでもなお拡大してしまう格差や青年期のインセンティブ・ディバイドに対応するために、20代を通じた学習と職業経験との試行錯誤、移動の可能性を高める第二の原則」（224頁）である。

- (6) 春日井敏之編『文学部インターンシップ特定非営利活動法人「ふらっと」報告論集』、2003年を参照。ここでは、京都市内の青少年活動センターや児童館などとNPO法人ふらっとに集うボランティアやインターンシップの学生・青年たちが協働して毎月のイベントを計画し、地域の青年や不登校児童生徒の出会いと交流のための居場所づくりが行われている。さらに、滋賀県内の私立高校（単位制）と協働して、ラーニングアシスタント（LA）と呼ばれる生徒への学習支援や相談活動も行っている。
- (7) 伊藤美奈子『思春期の心探しと学びの現場 スクールカウンセラーの実践を通して』北樹出版、2000年、49-52頁を参照。
- (8) 春日井敏之『希望としての教育 親・子ども・

教師の出会い直し』三学出版、2002年、46-48頁を参照。

- (9) 春日井敏之「教育実践と学校カウンセリングの可能性」斎藤稔正・林 信弘編『教育人間学の挑戦』高管出版、2003年、111-116頁を参照。
- (10) 宇城久教育研究所編『子どもの力を信じて「登校拒否の子どもと育つ父母の会」のあゆみ第2集』成文社、1996年を参照。ここには、設立の細かな経過や例会の参加者数の記録、世話人を初めとする父母の体験手記などが掲載されている。
- (11) 春日井敏之・大日方重利「登校拒否・不登校児の担任教師への支援の在り方に関する研究 スーパーバイザーからの支援を中心に」大阪教育大学教育研究所編『大阪教育大学教育研究所報』33号、1998年、33-43頁を参照。
- (12) 春日井敏之『自分らしく思春期 いじめ・登校拒否をのりこえて』かもがわ出版、1997年、74-80頁を参照。
- (13) 春日井敏之「不登校へのネットワーク支援と『父母の会』 子どもと向き合う大人が変わるとき」民主教育研究所編『季刊人間と教育』39号、旬報社、2003年、66-73頁を参照。
- (14) 高垣忠一郎『共に待つ心たち 登校拒否・ひきこもりを語る』かもがわ出版、2002年、1-5頁を参照。

(2003.12.25. 受理)